

待合室

Takimoto Kayo
MACHIAISHITU

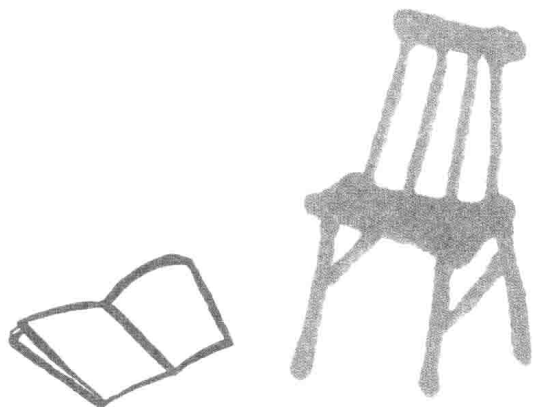
滝本香世句集



待合室

Takimoto Kayo
MACHIAISHITU

滝本香世句集



ふらんす堂



句集 待合室 まちあいしつ 百鳥叢書第81篇

二〇一五年八月一日 初版発行

著者——滝本 香世

発行人——山岡喜美子

発行所——ふらんす堂

〒182-0002 東京都調布市仙川町一―一五―三八―二F

電話——〇三(三三三二六)九〇六一 FAX〇三(三三三二六)六九一九

ホームページ <http://furansudo.com/> E-mail info@furansudo.com

振替——〇〇一七〇——一八四一七三

装幀——君嶋真理子

印刷所——(株)トヨー社

製本所——(株)松岳社

定価——本体二七〇〇円＋税

ISBN978478140787-6 C0092 ¥2700E

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

目次

序・大串章

獅子舞

15

春の雪

27

白日傘

63

冬瓜

107

鍵束

145

香世句八景・清水哲男

あとがき

序

滝本香世さんは平成9年にネット句会に入会し、平成11年に「百鳥」に入会している。俳句の初発がインターネットだったというのはいかにも香世さんらしい。「百鳥」入会2年目には早くもこんな句が見られる。

母の日や闇深き子のインターネット

インターネットを対象とした俳句は当時めずらしかった。私は早速この句を「百鳥の俳句」にとり上げ次のように書いた。

「闇深き子」は現代社会の落し子だろうか。独りパソコンに對い、自分だけの世界に没頭する。「母」にも理解できない「闇深き子」のインターネット。その「闇深き子」の心をひらくプログラムはないのだろうか。「闇」を「光」に変換する装置はないのだろうか。清水哲男の「増殖する俳句歳時記」など、案外その突破口になるのかもしれない」。(「百鳥」平成12年8月号)

俳句は密室の作業ではない。俳句は「座」の文学であり、ある意味で発信者と受信者の共同作業である。開放的な「増殖する俳句歳時記」が「闇深き子」の閉塞感を破ってくれるかもしれない、と思ったのであった。

その後も香世さんはインターネットに関わる句を作り、独特の存在感を示した。たとえばこんな句である。

春愁やインターネットに迷ひ込む
パソコンで追ふ雲二百十日かな
秋深しインターネットで詩集買ふ

「母の日」の句のインターネットは「闇深き子」のインターネットであるが、「春

「愁や」の句のインターネットは香世さん自身のそれである。「パソコンで追ふ雲」はインターネットで天気予報を見ているのだろうか。「秋深し」の句は、本屋ではなくインターネットで詩集を買っているところが現代的である。こうした購入方法の普及が、町の書店や古本屋を廃業に追い込んでいるとも聞く。行きつけの書店や古本屋で本の香りに浸りながら本を選んでいた私たち世代にはちよつと淋しい感じもするが、これも時代の趨勢というものであろう。

こうしたインターネットの句を読んでいると、香世さんは機械に詳しい現代的な女性という感じがする。特に私のような機械音痴にはそういう感じが強いが、香世さん自身は自分のことをどう思っておられるのだろう。自画像と思われる句をちよつと拾ってみる。

母の日や我しなやかに老いんとす
夕風や己が不機嫌持て余す
十三夜ややこしきこと嫌ひなり
小春日の正論吐いて了ひけり

1句目。正直言つて、香世さんにもこんな一面があるのかといささか驚いた。「しなやかに老いん」が伝統的な日本女性を一瞬髣髴とさせるからだ。しかし、考えてみると、香世さんにこういう句が生まれるのは決してふしぎではない。香世さんは、仕事である医業を着実にこなし、煩雑なインターネットを自在に駆使しながら、子育てに励み、俳句に精を出している。この句、「母の日」が効いている。2句目。これは一読よく分かる。自己省察の確かな句である。「不機嫌持て余す」とためらうことなく打ち出したところが香世さんらしい。3句目。これもよく分かる。「ややこしきこと嫌ひなり」と単刀直入に言い切ったところ、香世さんの面目躍如である。4句目。「正論」を「吐いて了」った、と言ったところが一句の眼目。この「吐いて了ひけり」には、反省の思いとそれを良しとする思いが交差している。

右の4句は、中七下五で自らの思いを忌憚なく述べている。しかし、それだけでは独り善がりの句になってしまいかねない。その弊をおぎない、句に奥行を齎しているのが上五の季語である。「母の日」「夕風」「十三夜」「小春日」の季語がそれぞれよく効いている。ここには真剣に俳句を学んできた成果が遺憾なく示されている。ところで、今回、香世さんの句を纏めて読んで、あらためて気づいたことが二つ

ある。一つは「子供」の句が多いこと、いま一つは「医業」の句が多いことである。

昇降機春着の子らの飛び出せり
むつかしき顔の子もゐて入学式
水鉄砲子の言ひ訳のあどけなし
終戦日愛国心を子に問はれ
眠る子の握るどんぐりそつと取り
クリスマス電車の好きな子に電車
七五三ひとり遊びの得意な子
葱坊主友多き子に育ちけり
帰省子の部屋から漏るるロックかな
爽やかに子は父親の顔となり

集中「子供」の句は30余句あるが、10句と限って挙げた。ここには、香世さんの子や孫もいるだろうし、近所の子供たちもいるだろう。いずれも優しいまなざしが感じられる抒情句である。子供の句では、「少女」と表記した句も忘れがたい。

「チューリップ並ぶ少女のVサイン」「少女抱くペットショップの子猫かな」「少女らの手話弾みたり花野かな」などがそれである。

診察は桜を愛でて始まり
さくらどき患者の足の途切れけり
脈取りて患家の辛夷問うてをり
老医師の沈黙長し扇風機
看護婦に汗押さへられ研修医
百歳の耳を診てゐる秋日かな
賜日和医師も患者も老いにけり
老医師の顔いつばいのマスクかな
冬帽を脱ぎて診察始まりぬ
治癒と記すカルテ収めて年暮るる

「医業」の句を10句と限って挙げた。ここには、香世さん自身と思われる医師が登場し、先輩格の「老医師」が登場する。又、「看護婦」が現れ「研修医」が現れる。

さらには「患者」も出てくる。まさに香世さんならではの世界であり、いずれも臨場感があり説得力がある。「鴉日和医師も患者も老いにけり」はやや感傷的ではあるが、医業に関わる歳月の長さを感じさせて惹かれる。

以上、「子供」の句と「医業」の句を挙げたが、この両者のコラボレーションも見られる。たとえば次のような句である。

医務始赤子泣かせてしまひけり
雛の日の絵本繰る子や待合室
春昼や起こさぬやうに赤子診る
風邪の子のがんばると言ひがんばりぬ
待合にゴム風船の子等増えて

1句目。「医務始」と「泣かせてしまひ」の取合せが眼目。新年早々残念、といった感じである。2句目。この「待合室」は言うまでもなく医院か病院の待合室。診察の順番を待ちながら子供が絵本を見ているのだ。3句目。「起こさぬやうに」に

女性医師らしい細やかな気づかいが見てとれる。4句目。「がんばると言ひがんばりぬ」には、痛みをこらえて治療を受ける子供へのエールが感じられる。5句目。風船を持った子が何人も治療を受けに来ることもあるのだ。いずれも、医師であり母である香世さんの優しい心づかいが看取される。俳句は自ずと作者の手柄をあらわすものである。

立春大吉赤鬼二日酔ひらしき
蛸焼きに蛸見つからぬ夜店かな
羅や聞えるやうに独り言
母の日と父の日合はせ祝はれし
迷ふほど市場の蟹の値引きされ
この案山子大阪弁をしやべりさう
看護師の愉快に太りカーディガン
手品師のごと札数ふボーナス日
義士の日の額しこたま打ちにけり

日向ぼこ女盛りの過ぎにけり

最後に、香世俳句の滑稽・俳諧味に触れておきたい。ここに見られるユーモア精神は、句集『待合室』を明るく豊かなものになっている。それは香世さんの生まれながらの性格でもあるにちがいない。心配ごとの絶えない子育てや、苦勞の多い医業の句を多く収めながら、『待合室』一巻があたたく和やかなのは、このユーモア精神に拠るものにほかならない。

滝本香世さんは、家庭と医業に携わる自らの立場を踏まえ、自由闊達に句作りを行っている。そこには紛れもなく香世さん独自の世界が生まれている。その世界は今後ますます広くなり、深みを増していくだろう。そのことを言い添えて私の拙い序を終わる。香世さん、句集の上梓おめでとうございました。

平成27年4月

大串 章

目次

序・大串章

獅子舞

15

春の雪

27

白日傘

63

冬瓜

107

鍵束

145

香世句八景・清水哲男

あとがき

句集
待合室